

2 THE NOUN: NOMINATIVE AND GENITIVE

第 2 章

名詞：主格と属格

ラテン語のどの名詞も不変な2つのもの、**語形変化と性**、それと変化する2つのもの、**数と格**を持ちます。語形変化の型は5つあり、性は3つあります——男性・女性・中性です。単数・複数の2種類の数と5つの格があります——主格・対格・属格・与格・奪格です。呼格もありますが、これは第9章で扱います。特定の名詞の形を**解剖する**(*parse*)とは、その格変化の型・性・数・格の名前を上げることです。名詞を**格変化させる**とは語形変化表(パラダイム)でそのすべての形を与えることです。

語形変化と性は、どのような名詞であっても不変なので、それぞれの名詞について覚えなくてはなりませんが、それでもそれらはときどき一緒なことがあります(例えば、第一変化のほとんどすべての名詞は女性)。数と格は語尾の変化で示されます。

古典ラテン語には定冠詞も不定冠詞(*the, a/an*)也没有。ラテン語から発達したロマンス語では、定冠詞は指示形容詞(*this/that*)から発達しました。そしてときどきこの発達の跡がスヴェーデンボリのラテン語にも見られます。ほとんどの場合、英語の名詞には冠詞が必要です。それで、翻訳者はどれを使うか決定を迫られます*¹。

事実上、どの点からみてもラテン語の単数と複数の区別は英語の区別と正確に一致するので解説の必要はないでしょう*¹。性は通常、生物学的な性が可能なとき、それに従いますが、しかしそうでないときは、むしろ予測できないものです。

格は、ある名詞が文の中で満たしている特別な機能を示します。英語では、このことは語順で表示されます。それで“*The boy saw the girl*”と“*The girl saw the boy*”は異なった叙述です。ラテン語では、最初の文は

“*Puer vidit puellam*”, “*Vidit puellam puer*”,

“*Puellam puer vidit*”, “*Vidit puer puellam*”,

“*Puer puellam vidit*”, “*Puellam vidit puer*”,

のどれもありえます。たとえこれらのある文のほうが他よりありえそうであってもです。第二の文を作るには“*puer*”(少年は)を“*puerum*”(少年を)に、“*puellam*”(少女を)を“*puella*”(少女は)にしなくてはなりません。すなわち、主語と目的語(この場合、見る者と見られる者)の違いが、語の位置によるよりも、むしろ形によって示されます。

主格

スヴェーデンボリが通常ヨーロッパ語族の系統に沿った比較的標準的な語順を用いたこと〔15ページ参照〕を思い出す読者もいるでしょうが、さらに格変化は、機能を決定する上で**常に優先権**を持ちます。主格の名詞は、それが文中のどこに出てきても、主格の機能を持ちます。

主格の基本的な用法は、何について語っているのかといった、話法での主語としての名詞を示します(§17)*²。……

属格

私が、属格に認めることができ、最も言いたいことは、これを非常に広く理解するとき、“支配”ということです——属格の本質は、制御しよう、そのもの自身を広げよう、そのものの存在をそれに(文法的に)附着しているものの中へ現わそうとする傾向です。

属格の一般的な用法は、前述の私の言いたいことと同じですが、所有(*habitationes angelorum*, 天使の住居)であって、これは**部分**(を示す属格)(*exteriora hominis*, 人間の外側(外見))、**物質属格**(*cor carnis*, 肉の心)、**主格属格***³文法(*correspondentia coelorum*, 天界の対応、これは「天界は対応する」を意味します)と密接に関連しています。